

『アビダルマ・ディーパ』における滅論

那 須 円 照

1. 序

この発表は、説一切有部（有部）の滅有因論と、経量部の滅無因論との、対論を検討するものである。

インド仏教後期の綱要書『タルカバーシャー』などでも中観派・唯識学派を含む四大学派の中の二つとされる、インドの部派仏教の二大学派である有部と経量部は、事物が滅するという現象について異なる見解を有する。有部は滅には原因があり、滅は実在すると主張する。経量部は滅には原因がなく、滅は非実在であると主張する。この二つの立場は、文化現象としての二つの立場を代表しているとも言える。

有部の立場は、事物が滅しても滅という名前を有するが、何らかのものが残るという立場である。経量部の立場は、事物が滅したら、虚無の状態になるという立場である。

有部の立場では、個々のダルマが、有というレベルでは変化がないと考えられ、事物が変化するという常識にあわないことになる。「諸行無常」という仏陀の定説にも厳密には抵触する。経量部の立場では、身心の滅が最終的にニヒリスティックな状態になるという望まれない立場になる。

この二つの立場を止揚して、超越したところに、唯識学派などの大乘仏教に見られる真空妙有の立場があるのであろう。それはともかく、この論攷では、有部の有論と経量部の無論との純粋な対論を、有部の立場から書かれた『アビダルマディーパ』（ADV）という論書にうかがい、両者の立場の違いを明らかにし、大乘仏教の真空妙有論の立場の前段階としての部派仏教の論

理を明らかにしたい。(ADV: p. 106.13-108.15 の和訳・解説研究)

先行する和訳研究として、三友〔2004〕がある。適宜参照させていただいた。

2. 有部（ディーパカーラ）の滅有因論の主張

katham punaḥ kṣaṇikasya dharmasya śaktihānir bhavati?

evam yasmād asyājahadātmakasya-

ekakāritranāsābhyāṃ śaktihāniḥ prasiddhyati //

yena khalu dārḍhyenopeto yam ekaṃ phalam ākṣipate / yadi tenaiva yuktaḥ
syād dvitīyamapyākṣipet / na cainaṃ śaktimantam anityatā himsyāt / tasmād
gamyate 'nyathībhūto 'yam anityatāvyaṅghrīmukhaṃ praviśatīty / ekaṃ phalam
ākṣipyā naśyatīty uktam etat- 'ekakāritranāsābhyāṃ śaktihāniḥ prasiddhyati /

どうして、また、刹那を有するものである法に、力の消失があるのか。

実に、なぜなら、この、いまだ本体が滅していないものには、

一つの作用と滅〔相〕とによって、力の消失が成立するからである。

実に、ある堅固性を有する〔法〕が、一つの結果を引く。もし、その同じもの（ある堅固性）と結合しているならば、第二の〔結果〕も〔法は〕引くであろう。従って、無常性（＝滅相）は、その力を有するものを破壊しないであろう。それ故に、別のものになったときに、このものが無常性（＝滅相）という虎の口に入る、と言うことが理解される。一つの結果を引いて滅するから、次のことが説かれている。「一つの作用と滅〔相〕とによって、力の消失が成立する」。

有部（ディーパカーラ）は自問する。有部にとって、法は刹那滅であるが、有部は一般的に刹那に幅を認める。刹那に幅を認めれば、その刹那内のある時点で、法がもう一時点同じものとして存続する本質を有せば、次の一時点でも、もう一時点同じものとして存続する本質を有するから、ある幅の

ある刹那を有する法は永遠に滅しなくなる。その法はどうして滅するのかと問う。(AKBh: P. p. 193.8-10, 那須 [2004a]: p. 749.7-11 参照)

ディーパカーラは、生じて現在に位置する法が、現在の一刹那内で、次刹那に現在に位置する法を引くという作用をなすと主張する。これは、同類因の取果作用である。(福田 [1988]: p. 62.b.7-14, Cox [1995]: p. 141.2-145.22 参照) もし、住相と長く結びついているなら第二の結果も法は引くであろうが、住相とはいつまでも結びつかず、一つの結果を引くだけであり、異相によって変化し、滅相によって力を消失し、滅するのである。(Rospatt [1995]: p. 57. 脚註123, 齋藤 [2001]: 註28 参照)

3. 経量部の反論（滅無因論）

na prasiddhyati, nirhetukatvād vināśasya / ye hy arthātmāno hetumantas te khalv anityā dṛṣṭāḥ / katham? aṃkuravat / na vināśasya vināśo 'sti, tasmād ahetukaḥ / kiñca, ye cārthātmanah paścādbhavanti teṣāṃ pūrvahetur asti tadyathā bhasmano bijādisaṃyogaḥ / na ca vināśasya hetur asti / tasmād asau na paścādbhavatīti / tatra yad uktam jātasya sthityanyathātvam apekṣya vināśo bhavatīti tad ayuktam /

〔このことは〕成立しない。なぜならば滅は原因を有しないからである。およそ、原因を有するものであるもろもろの対象の本体は、実に無常であると認められる。どうしてか。芽のように。滅には滅はない。それ故に〔滅は〕原因を有しない。さらにまた、もろもろの対象の本体は、後に存在するとき、それらには前の原因がある。例えば、種子等との結合を有する灰土のように。しかし、滅には原因がない。それ故に、これ（滅）は後に存在するのではない、と。この場合、生じたものには、住と異とを待って、滅がある、というそのことは不合理である。

ここで反論が述べられる。文脈から反論者が経量部であることは明らかである。もろもろの対象の本体（＝有為法）は、生じるのには原因があるが、滅するのには原因がないと経量部は主張する。(AKBh: P. p. 193.7-8, AKBh: P.

p. 193.16–17, 那須 [2004a]: p. 747.8–9 参照)

ここで、「滅には滅はない」と述べられているが、この記述は、世親の『成業論』(KSP)に見られる、滅有因論に対する反論を想定しているのであろう。滅に原因があり、滅が有為法であるということになれば、有部の教理によれば、有為法は必ず滅するから、滅も滅することになり、またその滅にも原因があり、また滅することになり、永遠に滅は滅し続けて、真の非存在としての完全な滅はいつまでたっても実現しないことになるのである。(KSP: M. p. 9.18–20, 那須 [2004a]: p. 753.5–754.1 参照)

よって、滅に原因がないなら、生じたその瞬間に滅するという道理になり、住相・異相の働きを待って、存続して変化して滅するということは不合理であることになる。

4. 有部（ディーパカーラ）の反論（滅有因論：総論）

atra pratyavasthānam-

[141]sati janmani tadbhāvād dravyakāritranāśataḥ /

āgamād upapatteś ca vināśo 'pi sahetukaḥ //

これに対して反論がある。

生があるとき、それ（滅）が存在するから、実体における作用の滅に基づいて、また、アーガマによって認められるから、滅も原因を有する。

これに対して、有部（ディーパカーラ）の反論が述べられる。偈では、生があるとき滅があり、その滅は作用の滅であり、世尊の經典によっても認められるから、滅に原因があると主張する。内容の詳細は、この三つ以外の他の説も含めて、各論において述べられる。

5. 有部（ディーパカーラ）の反論（滅有因論：各論-1）

sahetuvināśa iti sthāpanā / kutah? 'sati janmani tadbhāvāt /' uktaṃ hi bhagavatā -“asmin satīdaṃ bhavati / yāvad avidyāpratyayāḥ saṃskārāḥ /” sati

cotpattimati vināśo bhavati / tasmāt sahetukaḥ / yasya punar ahetukas tasya
prāg api janmanah so 'stīti janmaiva na syāt, viruddhānām anyataropapatteḥ /

原因を有する滅がある，とは，命題の陳述である。どうしてか。「生があるとき，それ（滅）があるから」。なぜなら，世尊によって説かれている。「これがあるとき，それがある。乃至，無明を縁として行がある」。生〔相〕を有するものがあるとき，滅がある。それ故に，〔滅は〕原因を有する。また，あるものが原因を有しないとき，その生じたものの前にも，それ（原因のないもの）は存在する。故に，生じたものはないであろう。もろもろの矛盾したものには二者択一性が認められるからである。

生じたものと滅とは，片方があれば，片方がないという矛盾関係にある存在であるから，生じたものが滅する場合，生じたものを，ある種の原因として，その次の滅があると主張する。滅は生じたものとの相対的關係により，その存在性が認識されるのであり，滅だけが原因を持たず，独立して存在すれば，それが滅であるということも認識されないのである。生じたものと比較して，滅があるのである。（『順正理論』：T.29. p. 533.c.15-18，那須 [2004a]: p. 751.27-752.12 参照）

また，例えば，あるものが原因を有しないなら，そのあるものは，その生じたものの前にも存在しうる。原因がないことに関して，いつでも等しいからである。それと同じように，滅に原因がなければ，原因がないことに関して，いつでも等しいから，ものが生じることはなく，いつでも滅があるということになってしまうであろう，と有部（ディーパカーラ）は考える。しかし，そのようなことはあり得ないから，滅には原因があるとディーパカーラによって主張される。（『順正理論』：T.29. p. 533.18-20，那須 [2004a]: p. 752.13-27 参照）

6. 経量部の反論（絶対的非存在としての滅）

tayor avirodhād vā tadvyapadeśānupapattir atāddharmyaṃ ca saṃskārāṇām iti /

また、この二つ（生じたもの、絶対的非存在としての滅）の間には矛盾はないから、それ（滅）の名称は認められない。諸行（＝諸有為法）はそれと同じ性質のもの（絶対的非存在としての滅のようなもの）ではない、と。

経量部にとっては、生じたものは存在するものであり、その滅は全く存在しない絶対的非存在である。一般に、ある存在するものは、別の存在するものとの間にのみ矛盾関係があるから、生じたもの（存在するもの）とそれの滅（全くの非存在）との間には矛盾関係がありえないとされる。よって、経量部にとっての滅は、名称に対応するダルマ（法）ではなく、名称に対応するダルマ（法）である諸行（＝諸有為法）と経量部にとっての滅とは異なる。

7. 有部（ディーパカーラ）の反論（滅有因論：各論-2）

dharmanāstitvamātram vināśa iti cet / na / tadastitvapūrvakatvāt /
astitvapūrvakam hi tan nāstitvam iti tad api sahetukam / nāsti kiñcit tad iti
cet / na / astitvavirodhānupapatteḥ / kiñca, bhāvavirodhitve saty abhāvasya
bhavatāpatteḥ / avirodhitve bhāvanityatvaprasaṅgād ubhayābhāve vānmātratvāt
/ kā caiṣā vāco yuktiḥ sati ca bhavati tadviśeṣyaś cātadvirodhī ca / na ca kiñcid
ity evaiṣā vāco yuktir asaṃbaddhā / nirarthikā caiṣā vāco yuktiḥ / atas te
bhāvābhāvo vāgvastumātram / pratiṣedhasāmarthyāt pratiṣedhyo bhāvo 'stīti
cet / nāsti / śaśaviṣāṇavac chabdo gaḍumātratvāt pratiṣedhadvayārthānupapattes
ca / kiñca, kāritramātranāśāc ca / viruddhapratyayasānnidhye kriyāmātram hi
nodeti, naśyati / tasmān nānarthavān vināśaśabdaḥ /

滅とは法の非存在性一般であるというならば、そうではない。それ（法）の存在性を先としているからである。その非存在性は、存在性を先としているから、それ（非存在性＝滅）も原因を有する。いかなるそれ（非存在性＝滅）も存在しないというならば、そうではない。[経量部の主張する絶対的非存在としての非存在性＝滅が] 存在性と矛盾する

ことは認められないことになるからである。さらに、[存在しないものに] 存在するものと矛盾する性質があるときに、存在しないものに存在性があることになるからである。[存在しないものに、存在するものと] 矛盾する性質がないときに、存在するものに常住性があることになってしまうからである。両方（存在するものと存在しないもの）が存在しないときには、言葉のみであるからである。存在するものにおいて、どんなその言葉の慣用が存在し、それ（言葉）によって限定されたものが[存在し]、それ（言葉）と矛盾しないものが[存在するのか]。いかなるものもないというだけの、この言葉の慣用は不合理である。また、この言葉の慣用は無意味である。この故に、あなたにとって、存在するものと存在しないものとは言葉というもののみである。否定によって否定される存在するものは存在するというならば、[そのようなものは] 存在しない。ウサギの角のように[否定の] 言葉は無用なものであるからであり、また、二つの否定（絶対否定と相対否定）の対象は認められないからである。さらにまた、[滅とは] 作用のみの滅であるから、矛盾した縁が存在するときに、作用のみが現前しない[つまり] 滅する。それ故に、滅という言葉は対象を有しないことはない。

最初に出てくる「滅とは法の非存在のみである」という主張が『順正理論』に出てくる譬喩論師（＝譬喩者）の説であると、三友[2004]の註74で指摘されている。（『順正理論』: T.29. p. 408.b.1-8, Cox [1995]: p. 324.11-31 参照）

これに対して、有部（ディーパカーラ）は、必ず存在性を先として、滅（＝非存在性）があるから、この滅は、先なる存在性というものを原因としていると主張する。この場合、ディーパカーラにとっての滅（＝非存在性）とは、何らかの実有な非存在という名称を持つ存在するものであろう。

また、ディーパカーラは、経量部の絶対的・非存在は、先なる存在性と矛盾することはないという。よって、先なる存在性と矛盾する性質を有する存在しないものが、後に、滅として、別の存在性として認められるべきであると

する。

また、先なる存在するものと後なる全く存在しないもの（＝滅＝絶対的非存在）とに矛盾しない性質があるときは、存在するものが常に等しく存在し続け、先なる存在するものが常住であることになってしまう、とディーパカーラは主張する。

また、もし、存在するものと存在しないものとの両方がないならば、言葉に対応する、つまり、言葉に限定された事物（ダルマ）はないことになり、言葉のみの世界になり、ダルマの体系が成立しなくなると、ディーパカーラは考える。経量部にとって、外界（存在するものと存在しないもの）は推理されるだけであり、存在性は直接的に、言葉の対象として証明されないからである。

また、言葉による否定によって否定される存在するものは存在し得ないと、ディーパカーラは主張する。二種の否定（絶対否定と相対否定）の対象は認められないとディーパカーラは主張する。

この議論は、『アビダルマディーパ』の三世実有論の議論の中で再検討されている。（那須 [2004b]: p. 68.6-17, p. 89.20-28 参照）ここで、検討する。

例えば、存在するものを言葉（否定辞）のみで否定することができれば、象と馬とがいなくなるために、王たちが象と馬とをわざわざ運び去る必要もないし、敵が存在するとき、敵は存在しないと言うだけで敵がいなくなることになるが実際はそんなことはない（敵はいる）。ここで否認される否定は、象や馬や敵の非存在のみを目的としており、他のものの肯定を含意しない。これは否定辞のみによる絶対否定を認めないことの例である。

また、ウサギの角の否定は、存在しないもの（絶対的非存在）の否定であるから、存在するもののみがあるであろう、とディーパカーラは主張する。しかし、これは、ウサギの頭におけるウサギの角という絶対的に存在しないものの否定ではなく、ウサギの頭と空界との結合の知識に依存して、牛の角等という実体とウサギの頭との非結合の知識が示されているのである。ウサギの角という存在しないものの否定は、それ（ウサギの角という絶対的に存

在しないもの）とは他の存在する角の肯定ではないのである。これは否定辞のみによる相対否定を認めないことの例である。

また、滅とは、この場合、滅相による作用のみの滅であり、作用を欠いたダルマ（法）は過去世に存在するのである。しかし、その作用の滅は、滅という言葉の対象として、実有なダルマとして、存在の一類型としての非存在性として、原因を有するものとして、存在するのである。

8. 有部（ディーパカーラ）の滅有因論に関する教証と理証

kutaś ca? āgamād upapatteś ca /

uktaṃ hi bhagavatā- “utpannānāṃ akuśalānāṃ dharmāṇāṃ nirodhāya” iti / tathoktaṃ- “ihaikatīyaḥ prāṇātipātiko bhavati” iti vistaraḥ / tathā- “tisraḥ saṃvartanyo ’nalajalānilākhyāyābhiḥ krameṇa yāvac chubhakṛtsnā vinaśyante” iti / tathā- “jātipratyayaṃ jarāmaraṇaṃ” iti /

upapattir api / janmano ’py ahetukatvaprasaṃgāt / yadi khalv asati sadbhāve ’py ahetuko vināśaḥ, janmāpy ahetukaṃ bhavatv iti / tatsamarthahetusāmagr-
īśannidhāne janmadarśanāt, tat sahetukatvam iti cet / na / tadvināśe tulyatvāt
tasyāpi samarthahetusāmagryantarannidhānābyupagamāt /

vyākhyātāni lakṣaṇāni //

また、どうしてか。アーガマと推論とに基づくからである。

実に、世尊はおっしゃる。「生じている不善法を滅するために」と。同様に説かれている。「ここに一種の殺生者がいる」と云々。同様に、「三つの災いは、火と水と風と呼ばれるものであり、これらによって、順次に、遍淨〔天〕に至るまで破壊される」と。同様に、「生を縁として老死がある」と。

推論もある。生じたものも原因を有しないことになるからである。もし、実に、存在性がなくても、滅は原因がない。生じたものも原因がないはずである、と。その機能と原因との集合したものが存在するとき、生じたものを見るから、それ故に〔生じたもの〕は原因を有するもので

あるというならば、そうではない。その〔生じたものの〕滅において等しい性質があるから、それ（滅）にも功能と原因との集合したものが別に存在することが認められるからである。

〔四〕相が説明された。

まず、有部（ディーパカーラ）にとっての教証が述べられる。この中には滅の原因が、『順正理論』で有部によって肯定的に認められて述べられる主因（＝滅相）とは別の、有部では否定される客因が、殺生者や火・水・風として述べられるが、滅に原因があるということの一般的な例として挙げられるのであろう。

次に、有部にとっての理証が述べられる。滅や生じたものが実在するものでなければ、それらは絶対的非存在であり、原因がないことになる。因（＝作用）と縁（＝功能）とが寄り集まって、生じるものがあり、滅もあるのである。（『順正理論』: T.29. p. 409.b.4-7, Cox [1995]: p. 331.20-26参照）生じたもののみが、見られるからあるのではなくて、滅も存在するものとしては見られないけれどもあるのである。その両者（生じたものと滅と）には必ず原因があるのである。以上のように、ディーパカーラは主張して滅論を結ぶ。

9. 結 論

以上の考察によって、経量部と有部の立場の違いが明らかになった。

経量部は、滅には原因がなく、滅は絶対的非存在であるとする。この場合、滅は完全な滅であり、それ自体の現象としては問題ない。しかし、有部によって反論される。滅に原因がないなら、どんなときでも滅に原因がないことは等しいから、常に滅の状態があり続けるという事態になってしまい、ものが生じるという実際見られる現象があり得なくなるという難点がある。また、滅が絶対的非存在の場合、それは全く存在しないから前に存在するものに対して、否定することができず、前のものが常住になるということも考えられる。これも現象の変化という現実に合わない。

有部は、滅には原因があり、滅は何らかの實在するものであるとする。これに対して、経量部は反論する。滅に原因があれば、有部の法の体系では、原因を持つものは有為法であり滅するものであるから、滅も有為法となり、滅もまた滅し、次の滅も原因を持つからまた滅し、いつまでたっても、滅の本来のあり方としての非存在にならなくなる。

経量部・有部双方ともに、以上のような決定的な難点がある。この難点の解決は、無と有を超える真空妙有という唯識学派などの大乘仏教の立場にゆだねられているのであろう。

略号・参考文献

- ADV: *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, ed. P. S. Jaini, Patna, 1959=1st. ed., 1977=2nd. ed.
- AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan, Patna, 1975=2nd. ed.
- KSP: 『成業論』, チベット訳校訂本, 室寺義仁, 1985 (*Karmasiddhiprakaraṇa*).
- 『順正理論』: T.29, 衆賢造『阿毘達磨順正理論』, 玄奘訳, 大正29, No. 1562.
- 齋藤 滋 [2001] 「説一切有部の有為相について『アビダルマ・ディーパ』と『大毘婆沙論』」, 『東海仏教』第46号.
- 那須円照 [2004a] 「滅に関する経量部・有部・正量部の対論」, 『神子上恵生教授頌寿記念論集 インド哲学仏教思想論集』.
- 那須円照 [2004b] 「*Abhidharmadīpa* (『アビダルマディーパ』) の時間論〈三世実有論〉試訳」, 『インド学チベット学研究』第7/8号.
- 福田 琢 [1988] 「『順正理論』に於ける有為の四相」, 『印度学仏教学研究』37-1.
- 三友健容 [2004] 「『アビダルマのともしび』第2章根品(4)」, 『大崎学報』160号.
- Cox, Collet [1995] “Disputed Dharmas Early Buddhist Theories on Existence: An Annotated Translation of the Section on Factors Dissociated from Thought from Saṅghabhadra’s *Nyāyānusāra*.”, *Studia Philologica Buddhica Monograph Series XI*, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- Rospatt, Alexander von [1995] “The Buddhist Doctrine of Momentariness A Survey of the Origins and Early Phase of this Doctrine up to Vasubandhu”, *Alt- und Neu- Indische Studien* herausgegeben vom Institut für Kultur und Geschichte Indiens und Tibets an der Universität Hamburg 47, Franz Steiner Verlag Stuttgart.